

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和7年1月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万5861トン、前年同月比89.4%、価格は1キログラム当たり357円、同143.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万1825トン、前年同月比95.1%、価格は1キログラム当たり314円、同141.4%となった。
- 3月は春物が本格化し、現状よりも出回りが増えることが予想されるものの、天候による影響や旺盛な需要が見込まれることから、価格は平年を上回る水準となることが予想される。

(1) 気象概況

上旬は、低気圧と高気圧が交互に通過し、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となった。旬平均気温は、旬後半に西日本を中心に強い寒気が流れ込み、西日本で低かった。旬降水量は、冬型の気圧配置や低気圧の影響から、東日本日本海側でかなり多く、北日本、および西日本太平洋側で多く、期間の終わりに冬型の気圧配置が強まり、日本海側の山沿いを中心に荒天で大雪となった所があり、北・東日本では記録的な大雪となった所もあった。一方、低気圧の影響を受けにくかった沖縄・奄美で少なかった。旬間日照時間は、冬型の気圧配置の影響や西日本付近では高気圧に覆われた時期もあったため、西日本太平洋側でかなり多く、北日本太平洋側と西日本日本海側で多かった。

中旬は、低気圧と高気圧が交互に通過した。旬平均気温は、寒気の影響を受けにくかった北・東日本で高く、大陸からの高気圧の張り出しに伴う寒気の影響を受けた沖縄・奄美で低かった。旬降水量は、

西日本日本海側でかなり少なく、北・東・西日本太平洋側と沖縄・奄美で少なかった。期間の中頃には低気圧や冬型の気圧配置が一時的に強まり、北日本日本海側を中心に大雪となり、記録的な大雪となった所もあった。旬間日照時間は全国的に多く、東日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多かった。東日本日本海側では、平年比181%となり、1961年の統計開始以降、1月中旬として1位の多照となった。

下旬は、冬型の気圧配置が長続きせず、高気圧に覆われた時期もあったため、旬平均気温は北日本でかなり高く、東・西日本で高かった。特に北日本では、平年差が+3.1℃となり、1946年の統計開始以降、1月下旬として1位の高温となった。旬降水量は、西日本と東日本太平洋側でかなり少なく、北日本日本海側で少なかった。旬間日照時間は北日本日本海側と西日本でかなり多く、東日本日本海側と沖縄・奄美で多かった。一方、低気圧の影響を受けた北日本太平洋側で少なかった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側 	日本海側 	日本海側 		日本海側
東日本				日本海側 	日本海側 	日本海側 	太平洋側 		
西日本				日本海側 			太平洋側 		

資料：気象庁「1月の天候」

1 平年を上回る水準 2 平年並み 3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万5861トン、前年同月比89.4%、

価格は1キログラム当たり357円、同143.1%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(1月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	95,861	89.4	85.2	357	143.1	144.1	403	350	332
だいこん	9,325	97.5	89.6	131	171.0	157.6	151	135	109
にんじん	5,314	88.7	82.2	193	162.8	159.6	190	193	193
はくさい	11,669	95.9	85.6	139	248.0	285.6	129	150	136
キャベツ類	10,456	76.1	74.1	235	307.6	280.6	315	239	183
ほうれんそう	1,476	94.1	100.0	663	142.6	120.7	795	673	579
ねぎ	4,251	91.9	84.5	484	150.8	160.9	596	490	399
レタス類	5,462	87.7	85.0	379	160.8	157.0	451	379	324
きゅうり	4,051	97.4	93.4	487	102.3	104.5	440	478	537
なす	1,392	101.2	88.9	538	119.6	120.2	562	551	512
トマト	4,258	87.0	80.8	476	154.5	146.0	544	474	430
ピーマン	1,474	97.7	95.2	740	120.6	116.1	652	731	826
さといも	494	112.6	98.5	384	102.7	116.5	416	385	368
ばれいしょ	6,063	85.5	85.3	231	175.5	150.2	225	226	239
たまねぎ	7,453	94.7	88.4	155	76.9	111.0	147	155	159

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、他品目に比べ値頃感があったことから下旬に向け下げたものの、やや安値で推移した前年を7割以上上回り、平年を6割近く上回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が、加工中心に絶対量不足から大幅な高値で推移し、下旬に向け落ち着いたものの、安値で推移した前年の3倍以上上回り、平年の2.8倍となった(図3)。

果菜類は、トマトの価格が高値での推移から中旬以降やや落ち着いたものの、前年を5割以上上回り、平年を4割以上上回った(図4)。

土物類は、ばれいしょの価格が、絶対量不足から堅調に推移し、やや安値で推移した前年を7割以上上回り、平年を5割以上上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

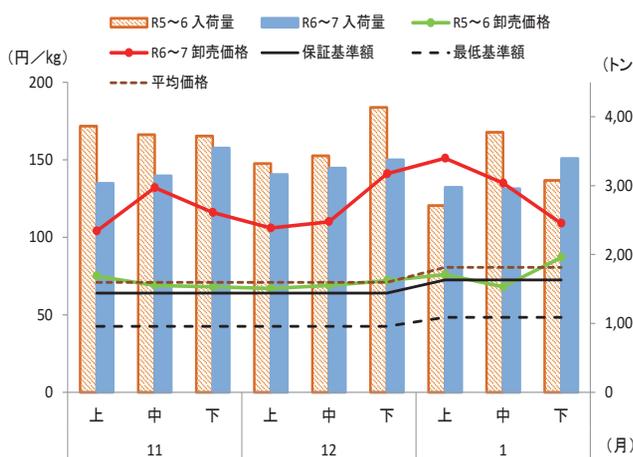


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

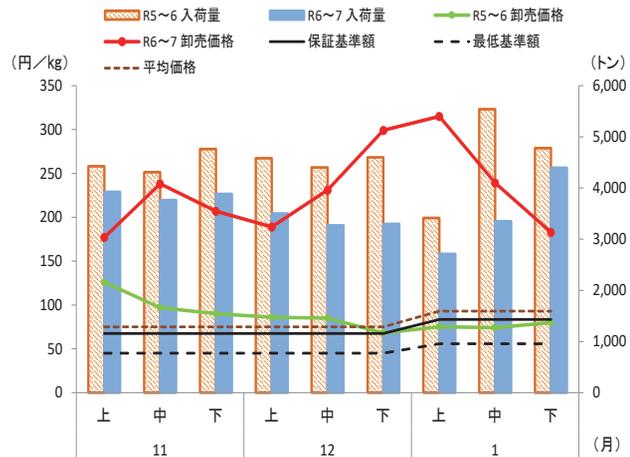


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

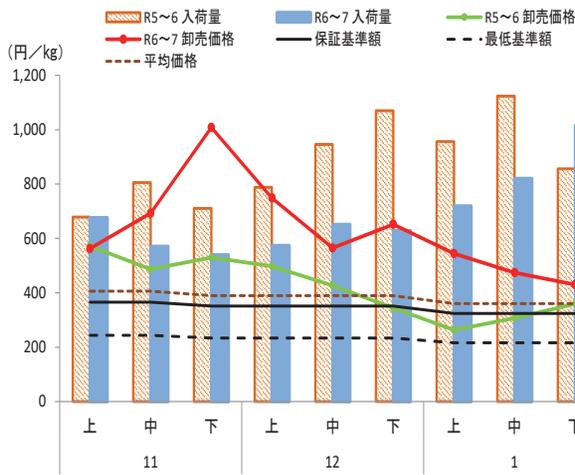
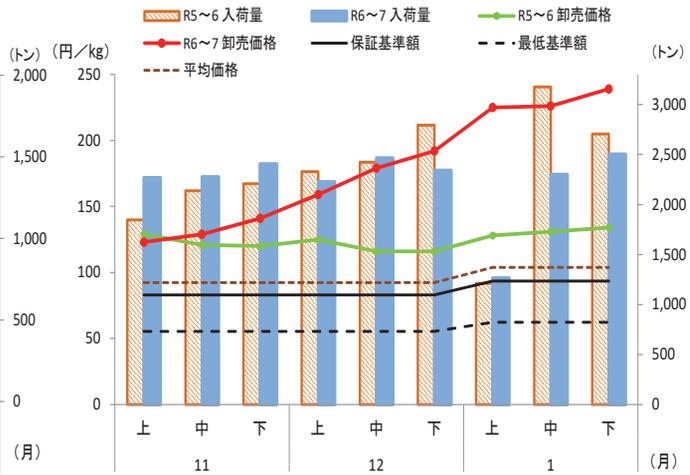


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	千葉産、神奈川産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、12月以降の低温と厳しい乾燥の影響により県下全域に生育遅延やばらつきがみられるものの、品質はおおむね良好である。神奈川産の作付面積は前年をやや下回っており、播種期から12月上旬までの気温高の影響により初期生育はやや前進傾向となっていたが、気温の低下と乾燥の影響により前年並みに落ち着き、目立った病虫害は見られない。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割強下回った。価格は他品目に比べ値頃感があつたことから下旬に向け下げたものの、やや安値で推移した前年を7割以上上回り、平年を6割近く上回った。
	にんじん	千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響による初期生育の遅延から回復傾向であったが、12月の低温と乾燥により肥大が進んでいない。輸入の中国産は前年の2倍以上となったが、総入荷量は少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。堅調な価格が続き、前年を約6割以上上回り、平年を6割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産を中心に群馬産などの入荷となった。茨城産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であり、高値が続き収穫が前倒し傾向となっている。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調で病害も少ない。乾燥の影響でやや重量不足が散見されるほか、一部アブラムシなどの虫害が散見される。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。価格は気温の低下と他品目に比べて値頃感があつたことから堅調な動きとなり、高値で推移した前年の2.5倍近くなり、平年の約3倍となった。
	キャベツ類	愛知産を中心に千葉産などの入荷があつた。愛知産の作付面積は前年並みで、曇天の影響で根の張りが悪く、さらに低温・乾燥により生育が遅延しており、虫害も多い。千葉産の作付面積は前年並みで、11月の曇雨天からの低温・乾燥で肥大が進まず小玉傾向である。降雨が少ない分、病虫害は収まっている。総入荷量は、前年、平年ともに2割以上下回った。価格は加工中心に絶対量不足から大幅な高値で推移し、下旬に向け落ち着いたものの、安値で推移した前年の3倍以上上回り、平年の2.8倍となった。
	ほうれんそう	群馬産、茨城産中心の入荷となった。群馬産の作付面積は前年並みで、夏秋産地はほぼ終了となった。一部、気温低下と乾燥の影響により露地作を中心に生育不良が散見された。茨城産の作付面積は前年並みで、急激な気温低下と乾燥の影響により露地作の生育が遅延した。総入荷量は暖冬傾向で多かった前年をやや下回り、前年並みとなった。価格は低温・乾燥の影響が大きく、特に露地作が月間を通して思うように増量しなかったことから、下旬に向け徐々に落ち着いたものの、安値で推移した前年を4割以上上回り、平年を2割強上回った。

	 <p>ねぎ</p>	<p>千葉産を中心に茨城産、埼玉産など関東秋冬作中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による生育停滞と作業遅れからは回復傾向にあったが、12月以降の厳しい気温低下で肥大が悪く停滞傾向である。茨城産の作付面積は前年を上回り、夏場の高温・乾燥の影響による生育遅延からはおおむね回復傾向にあったものの、その後の低温・乾燥により生育は停滞している。埼玉産の作付面積は前年並みで、生育は回復傾向で2Lの割合が増えてきたものの生育は若干の遅延が見られる。総入荷量は少なかった前年を1割弱下回り、平年を1割以上上下回った。</p> <p>価格は予想より増量ペースが緩やかで、下旬に向け落ち着いたものの、高値で推移した前年を5割以上上回り、平年を6割以上上回った。</p>
	 <p>レタス類</p>	<p>静岡県を中心に長崎産、香川産などの入荷となった。静岡産の作付面積は前年並みで、定植時の豪雨や低温・乾燥の影響により玉肥大にばらつきが見られている。長崎産の作付面積は前年並みで、おおむね順調も一部地域で低温・乾燥による生育遅延が散見された。香川産の作付面積は前年並みで、11月下旬に一部降雹被害が見られた。12月の乾燥により生育停滞するも、回復傾向にあるが、各産地とも乾燥により小玉傾向である。総入荷量はやや少なかった前年、平年ともに1割以上上下回った。</p> <p>価格は、加工中心に引き合いが強く、下旬に向けて落ち着いたものの、前年を6割強上回り、平年を6割程度上回った。</p>
果菜類	 <p>きゅうり</p>	<p>宮崎産を中心に千葉産、高知産などの入荷となった。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調も一部天候不順の影響により着果不良が散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、越冬作では病害の発生が前年より多いものの、生育自体はおおむね順調であった。半促成作は燃油高から定植を遅らせており、出荷量は少ない。高知産の作付面積は前年並みで、好天が続き出荷量も安定してきたが、病害が増加傾向にある。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなり下回った。</p> <p>価格は絶対量不足から堅調に推移し、下旬に向け価格を上げ、前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。</p>
	 <p>なす</p>	<p>高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、樹勢は回復基調にあり、開花・着果数は増加している。気温の低下に伴い虫害も減少しており、中旬以降増量となっている。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年を1割以上上下回った。</p> <p>価格は下旬に向け落ち着いたものの、前年並みであった前年を2割弱上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	 <p>トマト</p>	<p>熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年を下回り、ミニトマトへの移行が進んでいる。低温・日照不足の影響から回復傾向にあるものの着色不良が顕著で小玉傾向となっている。病虫害の発生は少ない。栃木産の作付面積は前年並みで、促成作の生育速度は遅いものの大玉傾向でおおむね順調であり、病虫害は少ない。冬春作は順調である。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はやや遅延しており、病虫害が散見される。総入荷量はやや少なかった前年を1割以上上下回り、平年を2割近く下回った。</p> <p>価格は高値での推移から中旬以降やや落ち着いたものの、前年を5割以上上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	 <p>ピーマン</p>	<p>宮崎産を中心に高知産、茨城産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調であったが、一部着果負担による樹勢低下が散見され、病虫害も見られる。高知産の作付面積は前年並みで、栽培初期の高温と曇雨天により根張りが悪く、生理障害が散見された。虫害は少ないが、一部うどんこ病などの病害が散見される。茨城産の作付面積は前年並みで、生育遅延からは回復傾向も樹勢はやや弱く、全体的に小玉傾向となっている。総入荷量は前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。</p> <p>絶対量不足から中旬以降価格を上げ、前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。</p>
土物類	 <p>さといも</p>	<p>埼玉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、生育は良好で収穫を終えた。輸入の中国産については前年をわずかに上回った。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は下旬に向け徐々に落ち着き、やや高めに推移した前年をわずかに上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	 <p>ばれいしょ</p>	<p>北海道産を中心に長崎産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫を終えた。干ばつ傾向から気温の上昇と適度な降雨により回復したものの、残量は多くない。長崎産の作付面積は前年並みで、高温と10月の降雨の影響により作柄は悪く小玉傾向である。総入荷量は前年、平年ともに1割以上上下回った。</p> <p>価格は絶対量不足から堅調に推移し、やや安値で推移した前年を7割以上上回り、平年を5割強上回った。</p>
	 <p>たまねぎ</p>	<p>北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで収穫を終えた。中晩生以降の品種は小玉傾向となっている。輸入の中国産は前年を4割以上上下回った。総入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上上下回った。</p> <p>価格は、数量が少なめであったものの暴騰していた前年を2割以上上下回り、平年を1割以上上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万1825トン、前年同月比95.1%、

価格は1キログラム当たり314円、同141.4%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(1月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	31,825	95.1	90.7	314	141.4	147.2	360	306	293
だいこん	2,845	93.0	86.5	124	162.8	178.4	149	125	105
にんじん	1,936	92.2	87.5	188	177.6	179.1	208	196	169
はくさい	4,779	116.3	106.6	158	246.2	274.5	175	166	140
キャベツ類	3,588	80.8	82.1	211	280.8	276.2	308	192	180
ほうれんそう	381	73.1	83.0	736	163.6	137.6	884	781	632
ねぎ	998	97.5	93.1	630	144.9	153.5	776	654	517
レタス類	678	74.3	73.3	386	171.7	167.0	441	393	344
きゅうり	966	95.1	94.9	456	106.4	106.0	400	443	507
なす	445	120.0	120.4	546	127.8	132.0	531	556	546
トマト	1,361	101.3	102.0	459	157.3	145.8	508	485	410
ピーマン	437	125.6	133.6	711	119.7	116.9	623	693	801
さといも	81	70.0	70.0	496	130.8	156.2	560	476	474
ばれいしょ	2,667	100.4	96.9	230	186.8	153.7	212	241	228
たまねぎ	4,479	100.4	101.5	149	82.0	115.0	139	150	154

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	鹿児島産、徳島産、和歌山産が主体となる入荷であった。長崎産など他産地の入荷もあった。播種後の気温高による初期生育不良の影響と、急な気温低下による生育遅れから各産地とも産地出荷量が少ない状況が続いた。特に九州産地の入荷量が少なく、鹿児島産と長崎産は前年を大幅に下回った。徳島産の入荷は比較的順調であったが、月間全体では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は継続する野菜全体の品薄感と高値の影響が残る中、入荷量が増えないことから高騰が続き、月間では前年の1.6倍、平年の1.7倍以上となった。
	 にんじん	鹿児島産と長崎産が主体となる入荷であった。両産地とも急な気温低下で生育が進まず小玉傾向で、産地出荷量が少ない状況が続いた。長崎産は旬を追うごとに入荷増量傾向ではあったが入荷量自体は伸びず、月間では前年をかなり下回った。鹿児島産は中旬に入荷増量となったが下旬に減量し、月間では前年を大幅に下回った。国産が小玉で少ない状況の中で輸入の中国産の太物を中心とした入荷が増え、月間では前年の10倍近い入荷量となった。月間全体の入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は野菜全体の高値の影響と品薄感、また今後増量となる気配が薄く、単価高が続いた。月間では前年、平年ともに1.7倍以上となった。
葉茎菜類	 はくさい	茨城産を中心とし、兵庫産や愛知産などの入荷があった。初期生育時の気温高と、その後の急な気温低下で生育が遅れていたものが中旬以降に回復傾向となり、茨城産は旬を追うごとに入荷増量し、入荷量は全旬とも前年を大きく上回った。愛知産は生育遅れからの回復が遅れ、前年の半分以上の入荷量にとどまった。月間全体の総入荷量は前年を大幅に上回り、平年をかなり上回った。 価格は野菜全体の単価高もあり、継続した高値の影響から高騰したまま推移した。入荷増量と、高値の反動から旬を追うごとに下落傾向ではあったが、月間では前年の2.5倍近く、平年の2.7倍以上となった。
	 キャベツ類	寒玉キャベツは愛知産を主体とし、茨城産や大阪産などの入荷があった。愛知産は、定植期から生育初期の気温高とその後の急激な気温低下により生育不良が続き、入荷量は旬を追うごとに増量傾向も伸び悩み、月間では前年を大幅に下回った。この不足分を茨城産で補てんする形となったが、旬を追うごとに減量傾向で、月間全体では前年を大幅に下回った。春キャベツも愛知産が主体となったが、生育遅れが目立ち産地出荷量が極端に少なく前年の3割程度の入荷量にとどまった。月間全体でも前年を大きく下回り、キャベツ全体でも前年、平年ともに2割程度少なかった。 価格は品薄感から高値の影響が継続し、業務関係の契約分の確保のため、高騰したまま推移し、中旬以降下落したものの、月間では前年の2.8倍以上となり、平年の2.7倍以上となった。

	<p>徳島産と福岡産が主体となる入荷であった。低温・干ばつの影響により生育が悪く、両産地とも旬を遡うごとに入荷増量傾向も伸び悩み、月間の入荷量は徳島産で前年をかなり下回り、福岡産は前年の半以下にとどまり、総入荷量は月間全体でも前年を2割以上下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>絶対量不足と野菜全体の高値の影響から、高値で推移し、月間では前年の1.6倍以上となり、平年の1.3倍以上となった。</p>
	<p>群馬産を中心に、この時期の主力である埼玉産、鳥取産、静岡産の入荷があった。東日本の産地は潤沢な出荷となり、月間の入荷量は群馬産で前年をかなり上回り、静岡産は前年を大幅に上回り、埼玉産も大きく上回った。鳥取産は旬を遡うごとに増量傾向の中、月間では前年を大幅に下回った。月間全体では前年をかなり上回った。</p> <p>価格は野菜全体の高値の影響を受け、需要期で気温低下から引き合いも高まったことにより高値で推移し、月間では前年を大幅に上回った。</p>
	<p>徳島産を中心とし、高知産や香川産、近隣産地の大阪産や奈良産の入荷などがあった。急な気温低下と干ばつの影響により産地出荷量が少なく、徳島産は旬を遡うごとに入荷増量傾向も月間では前年を大幅に下回った。他産地も同様に伸び悩み、月間全体の入荷量は前年を下回った。</p> <p>価格は絶対量不足に加えて野菜全体の高値の影響から高騰し、単価高で推移した。月間では前年の1.6倍以上となった。</p>
	<p>ラップ物は兵庫産を中心とし、香川産や徳島産などの入荷もあった。裸物は長崎産が中心となる入荷であった。各産地とも急な気温低下と干ばつにより生育不良で産地出荷量が少ない状況が続いた。前年の入荷量が少なかったため兵庫産の月間の入荷量は少なかった前年を上回ったが、他産地のラップ物は前年の3割程度と極端に少ない入荷量で、月間全体では前年を大幅に下回った。サニーレタスは福岡産が中心となり、レタス同様に低温・干ばつの影響により産地出荷量が少なく、全旬を通じて入荷量は伸び悩み、月間全体では前年を下回った。リーフレタスは福岡産が中心となり、レタスなどと同様に低温・干ばつの影響により産地出荷量が少なく、月間の入荷量は前年をかなり下回った。レタス類全体でも月間の入荷量は、前年、平年とも大幅に下回った。</p> <p>価格は品薄感と野菜類全体の高値の影響により高騰し、旬を遡うごとに下落傾向も高値で推移した。サニーレタスとリーフレタスも同様で、月間では前年の1.7倍以上となり、平年の1.6倍以上となった。</p>
<p>果菜類</p> 	<p>宮崎産を中心に、高知産も主体となり、徳島産の入荷もあった。宮崎産は急な気温低下で産地出荷量が減少し、入荷量も全旬を通じて伸び悩み、月間では前年を下回った。高知産は前年並みで、月間全体では前年、平年ともやや下回った。</p> <p>価格は野菜類全体の高値の影響と節分の恵方巻需要に向けて旬を遡うごとに上伸した。月間では前年、平年ともかなりの程度上回った。</p>
	<p>千両系は高知産が中心となる入荷で、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。高知産は中旬に出荷が集中して入荷増量となり、月間では前年並みとなった。九州産地は上旬と下旬の入荷が多く中旬は落ち込んだが、月間では前年をかなり上回った。月間全体では前年、平年ともに2割以上上回った。</p> <p>価格は前月から続く高値に加え、野菜類全体の高値の影響もあり全旬を通じて高値で推移した。月間では前年の1.2倍以上、平年の1.3倍以上となった。</p>
	<p>愛知産と熊本産が主体となる入荷であった。着色遅れとなっていたものが中旬以降に集中し、下旬の入荷量が増量となった。月間の入荷量は前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は前月までの高値の影響と、野菜類全体の高値の影響から高値でスタートとなり、旬を遡うごとに下落傾向となったものの、月間では前年の1.5倍以上となり、平年の1.4倍以上となった。</p>
	<p>宮崎産が中心となり、高知産などの入荷があった。潤沢な入荷が続き、月間全体では前年の1.2倍以上、平年の1.3倍以上となった。</p> <p>価格は野菜類全体の高値の影響もあり、入荷量が多い中でも旬を遡うごとに上伸を続け、月間では前年を2割近く上回り、平年を1割以上上回った。</p>
<p>土物類</p> 	<p>愛媛産が中心となる入荷となり、生育期や収穫時期の気温高や干ばつの影響から不作となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。業務関係を中心に輸入の中国産を利用する傾向となり、中国産の月間の入荷量は前年の2倍以上となった。給食需要もあり不足分は山形産で補てんする形となったが、山形産も入荷量は少なく、月間全体では前年、平年ともに3割以下となった。</p> <p>価格は絶対量不足と野菜類全体の高値の影響もあり、給食需要のあった上旬に高騰し、中旬以降はやや下落したものの高値で推移し、月間では前年の1.3倍以上となり、平年の1.5倍以上となった。</p>
	<p>丸芋は長崎産の新物が中心となり、鹿児島産の新物や北海道産の残量入荷も主体となった。九州産地が急な気温低下で生育不良となり、産地出荷量は伸び悩んだ。メークインは北海道産の入荷となったが、産地出荷量が少なく全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。ばれいしょ全体では月間の入荷量は前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は品薄感に加えて野菜類全体の高値の影響もあり、高騰が続き、月間では前年の1.8倍以上となり、平年の1.5倍以上となった。</p>
	<p>北海道産が中心となる入荷に、兵庫産の入荷もあった。北海道産は産地残量も多く、輸送障害などもなく順調な出荷が続き、月間の入荷量は少なかった前年を大幅に上回った。兵庫産は前進出荷が続いた結果、産地残量が少なく入荷量も前年の半分程度にとどまった。月間全体では前年、平年ともわずかに上回った。</p> <p>価格は北海道産の不作の影響による高値であった前年を2割程度下回り、野菜全体の単価高の影響から平年を1割以上上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした3月の見通し

3月には春物が本格化し、現状よりも出回りが増えることが予想される。秋冬の露地野菜は前進しており、採り遅れがなければ急増の場面はないと見込まれるが、今後の天候の影響によることも大きく、干ばつ傾向の場合は野菜の出荷が遅れ、多雨傾向の場合は相場が落ち着くと予想される。3月は年度末のため、消費地での会合の機会が増えるなど業務需要が旺盛になる時期である。また、気温によってはサラダ商材に切り換わる時期でもあり、出回り量が増えても需要も旺盛であることから、野菜価格は平年を上回る水準となることが予想される。

根菜類



だいこんは、神奈川産の2月の冬だいこんは低温と干ばつ気味であったため小ぶりに仕上がっている。また、全体的に前進しており、3月の春だいこんはやや平年を下回る可能性がある。千葉産は前年より少なめの出荷となっているが、高値であることから早めに出荷されている。トンネル物の春だいこんは2月10日頃から増え、3月中旬までは現状と同じペースで推移し、3月下旬には急増してピークになると予想される。3月としては、低温の影響により出荷が少なめであった前年を上回る出荷が予想される。

にんじんは、千葉産は肥大不足もあり2月初旬時点ではMサイズ中心で、例年の90%程度の出荷となっている。3月上旬までピークが続き、その後減少し3月いっぱい切り上がり、ほぼ平年と同様の展開が見込まれる。徳島産は3月初めは走り物で、3月10日頃から増え始め最大のピークは4月中旬と予想される。作柄は良好で、サイズはM中心のLとなり、品種は「彩誉」である。

葉茎菜類



キャベツは、愛知産はシーズン開始から小玉傾向で出荷されており、これは定植時期の根の張りが悪いことが要因の一つである。圃場には物があり、2～3月は大玉の物が増えて来るが、春キャベツも遅れていることから、3月も前年の70～80%程度と少なめの出荷が予想され

る。千葉産は1月の降雹^{こひょう}で一部が影響を受け、2月初旬時点で前年の65%と少ない出荷である。2～3月に適度な降雨があっても良くて現状維持であり、場合によってはさらに減少し前年の60%ペースも予想される。神奈川産は早蒔^{まき}きの物は2月中・下旬から出荷され、11月中旬に定植した物は例年3月には出てくるが、今年は12月～翌1月の干ばつと低温の影響から遅れており、出荷が少なくなる時期があり、増え始めると急増が予想される。

はくさいは、茨城産は年明けの出荷は例年の70～80%と減少しており、今秋冬物は2月中旬で切り上がり、3月に入り春はくさいが開始すると見込まれる。11～12月の定植は順調に行われており、早めの出荷開始が予想されるが、生育期間中の干ばつにより、やや小玉の仕上がりが予想される。それでも大きな落ち込みはなく、3月下旬から4月がピークとなり、例年並みの出荷が予想される。兵庫産は冷蔵庫に入れながらの出荷で、圃場には半分程度残量がある。平年と同様に一箱4玉サイズで出荷したいものの、やや小ぶりの仕上がりである。収穫は2月いっぱい、3月は冷蔵品となり、量的には平年並みかやや減と予想される。

ほうれんそうは、埼玉産は2月に入り例年通りの出荷で、3月も平年並み、4月に入り減少が見込まれる。全般的に生育は順調だが、寒波により出荷が伸び悩む場面も想定される。栃木産は、生育順調で2月も引き続き横ばいで推移し、3月中まで前年並みが予想される。

ねぎは、千葉産の産地は海^{かい}匠^{そう}地域で、秋冬物は少なかった前年の80～90%、平年の70～80%とかなり少なくなると見込まれる。3月には春ねぎが開始し、例年並みに追いつくと予想されるが、春ねぎは定植後の予後が悪く、その後の寒さの影響を受け遅れ気味である。埼玉産は11月までは高温、その後は干ばつで推移した影響により細物の出荷が多く12月までは70%弱の出荷となったが、年明けには例年と同様に2Lサイズが増えて出荷も回復してきた。2月初旬時点では寒波による枯れ葉も例年より多く見られ、さらに曲がりも多くなってい

る。3月には春ねぎも始まるが、数量は平年を若干下回る出荷が予想される。茨城産は3月に入り例年どおり春ねぎも開始するが、秋冬物は年内から続く高値により、前倒し気味に出ており、2月の出荷が薄くなる可能性が見込まれる。3月については平年並みを予想している。

レタスは、兵庫産は2月初旬時点で平年の80～90%程度の出荷となっており、増えてくるのは3月中旬以降と予想される。作付けの減少も影響し、3月も例年の80～90%と少ない見込みである。2月初めに降雨はあったものの、12月～翌1月が干ばつ気味で高品質に仕上がっている。静岡産は、2月初旬時点では例年より若干少ない出荷が続いている。気温が低いこともありやや収穫ができていない。2月10日以降に平年並みに追いつき、気温が上がる3月上旬にピークがあり下旬には終盤に向かうことが予想される。香川産は干ばつ気味だが生育は順調であり、ピークは3月上中旬で、切り上がりは5月20日頃となり、ほぼ例年並みの出荷が予想される。茨城産はトンネル物となるが、生育は順調で平年並みに2月からの出荷開始が見込まれる。昨年は年明けの暖冬で前進して1月から出荷が始まり、3月は寒の戻りで出荷減となった。今年は平年通りで、3月は前年を上回る出荷が予想される。

果菜類



きゅうりは、群馬産は2月に入り気温が下がったが、しっかり加温し前年並みに出荷できると見込まれる。寒波の影響により、2月後半に遅れるとその反動で3月前半に多く出荷され、後半は天候の乱れで出荷減の展開が予想される。2024年の高値により、25年も生産者の生産意欲は旺盛であると予想される。埼玉産は、2月初旬時点では定植したばかりで、加温にかかる経費を減らしたいため後ろにずれ込んでいる。作付けは前年並みで、当面のピークは3月中下旬で、その後は5月の大型連休頃に再度ピークと予想される。宮崎産は年明けからは平年並みの出荷となっている。2月の寒波によりピークが終わり一旦はやや減るものの、2月末頃から再び増え3月も平年並みの出荷で6月まで継続する見込みである。

なすは、高知産は平年並みに回復しており、着果数も問題ないが、2月上旬からの寒波の影響により肥大が遅れて出荷の伸びが止まることとが予想される。晴天が続いていることから、樹勢の低下はないと見込まれ、3月は気温が高くなれば平年並みの出荷が予想される。福岡産の長なすは年明けの厳寒期を迎え、平年並みの出荷状況となっている。2月上旬に再び厳しい寒波が来て一時的に出荷減が予想される。それでも花数も実の数も問題なく付いており、好天となれば順調に収穫され、3月は平年並みの展開が予想される。

トマトは、熊本産は、今年は例年より日照時間は長いものの寒暖差が激しく、樹勢は思わしくない。2月初旬までの出荷は例年の80%程度と減少した。本来は2月初めから増加するが、微増で推移し、2月末頃から本格的に増え、3月は例年を上回ると予想される。

ミニトマトは、栃木産は黄化葉巻病おうかはまきびょうが散見されるが、生育そのものは順調で平年並みとなり、3月はある程度増えて前年並みで、当面の出荷のピークは4月と予想される。現状の出荷物の中心サイズは2L、L中心であるが、3月にはばらついた仕上がりになると見込まれる。愛知産は2月初旬時点では前年の90%程度の出荷となっており、2～3月は平年並みになり5月に最大のピークまで増加しながら推移すると予想される。中心サイズはMである。

ピーマンは、高知産は、2024年10月の曇雨天により出遅れ、樹のバランスが崩れた影響により2月初旬時点で例年の80%程度の出荷となっている。4月にピークとなり、当面は例年の80%ペースで推移すると見込まれる。茨城産は例年通りの2月2日から春ピーマンの出荷が開始した。作付けは前年並みで、3月下旬の彼岸頃に最初のピークが来ると予想される。ここ1～2年の3月は天候不順により少なめの出荷であったが、今年は平年並みとなり、少なかった前年を上回ると見込まれる。

土物類

ばれいしょは、鹿児島産は生育そのものは問題がなかったが、^{もくどり}椋鳥による食害が、いもの肥大に影響している。選果は1月末頃から開始し、出荷は2月から始まり3月にピークとなり4月中旬まで継続するが、当初の見込みより20%程度の減少が予想される。北海道産（道南）は収量が前年比90%強と若干少ないため、例年より3週間程度早く3月20日前後に切り上がると見込まれる。

たまねぎは、北海道産は2～3月は例年並みの量とスピードで出荷されると見込まれる。23年産が小玉傾向であったが、24年産は大玉でL大が中心となり、切り上がりのタイミングは例年と同様の3月末と予想される。熊本産は「サラタマ」が1月末から開始し、生育は順調で3月には横ばいから増加し、4月上旬がピークと見込まれる。作付けの減少から前年を下回る出荷が予想される。

その他

ブロッコリーは、愛知産は2月初旬時点で、例年の60%の出荷レベルまで回復してきたものの、仕上がりが小さく箱数が伸びなかった。圃場により差があるが、2月の初めの降雨により、例年並みに近づくと見込まれる。定植が重なったこともあり、3月は急増してピークとなり、そのまま推移し4月も同程度の出荷が予想される。香川産は2月初めの降雨により、外葉がようやく生き生きしてきたものの、初期生育が思わしくなく、^{からい}花蕾は大きくならない。そのため現状は前年の85%ペースとなり、2月中下旬にピークが来て、3月は減少傾向で推移しつつも平年並みの出荷まで回復することが見込まれる。熊本産は2月5日からの寒波でますます減少し、生育は2～3週間遅れており、出荷が増え始めるのは2月下旬からとなり、ピークは春物の出始める3月後半となることが予想される。

かぶは、千葉産のかかぶが年末年始までは肥大が遅れていたが、2月初旬時点で、3L・4Lが増え、2～3月がピークと見込まれる。生育は順調で、採り遅れ傾向で大きくなり過ぎる心

配があるものの出荷量は前年並みと予想される。

かぼちゃは、沖縄産は11月までの高温、その後の寒さと日照不足に加え強風の影響も重なり着果が悪く、2週間遅れの1月中旬から出荷が開始した。2月後半の出荷分から生育環境は回復し、3月中下旬が出荷のピークと予想される。

かんしょは、千葉産は貯蔵の「べにはるか」が中心の出荷で、ほぼ前年並みと見込まれる。中心サイズはLで、6～7月まで継続した出荷が見込まれる。

たけのこは、静岡産は今年は裏年で、さらに降雨量が少ないこともあり前年の60%程度と予想される。ピークの4月上旬からは10キログラム箱で出荷となるが、3月は4キログラム箱で出荷され、4月下旬には切り上がると予想される。千葉産は例年通り3月中旬から出荷が開始するが、今年は表年で前年より出荷が多くなると予想され、ピークは4月上旬中で、2キログラム箱での出荷が見込まれる。

アスパラガスは、佐賀産は例年より遅く出荷開始したが、天候によってはさらに遅れる見込みである。それでも2月下旬には増え、3月10日前後にピークが来ると予想される。

さやいんげんは、沖縄産は11月下旬から開始したが、現状は30%程度の収量ダウンとなっている。これは2024年の9月に台風が複数接近した影響により、圃場の整備が遅れて植え付けが完全に出来なかったためである。3月は出荷のピークとなり、4月20日過ぎには例年より10日以上早く切り上がると予想される。

そらまめは、鹿児島産は2月中下旬から増え始め、生育順調であり3月が出荷のピークと見込まれる。2月上旬の寒波の影響が心配されるが、問題なければ順調な入荷が見込まれる。年々、作付けは減少傾向にある。

スナップえんどうは、鹿児島産は平準のペースで推移している。2月の出荷が多く、3月まで継続が見込まれる。

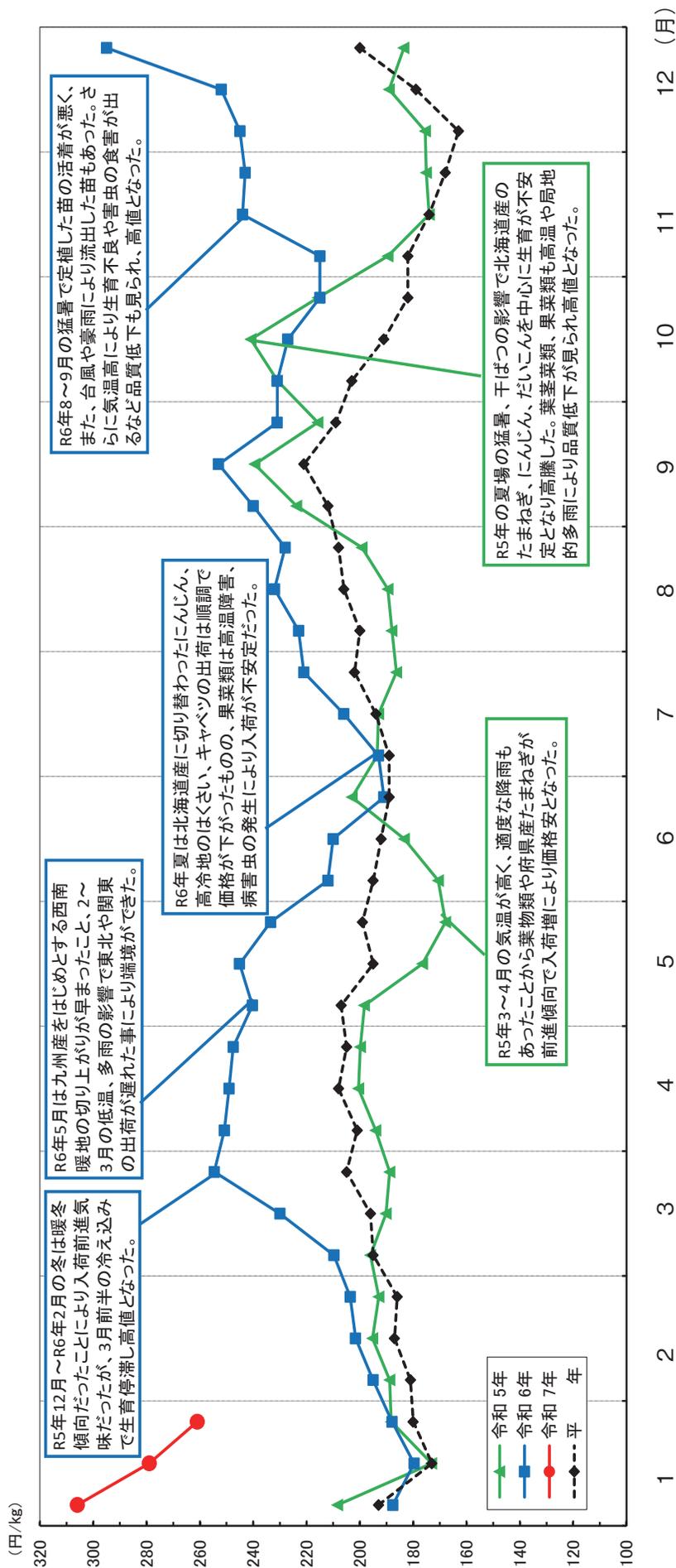
いちごは、栃木産の「とちあいか」は年内の出荷の伸びを欠き、年末年始まで少なかった。1月中旬から2番果の出荷が増え、2月以降は安定して推移し、本格的な増量は2月末か3月に入ってからと見込まれる。福岡産は2月初旬時点では2番果はまだ本格化しておらず、今後のピークは3月下旬に来ると予想される。夏の猛暑で苗の質が悪く、芽のばらつきも目立ち、生育に時間がかかっており、当面例年の70%台の出荷と予想される。熊本産は県が育成した「ゆうべに」と国が育成した「恋みのり」となり、本作は樹勢が旺盛で、例年より早く11~12月にかけて多く出荷され、年末には減少した。1月は安定した出荷となり、2月中旬頃から2番果が本格化し、3月はかなり出荷が増えると予想される。今年の特徴は日照時間が長く、後半に盛り返す令和3年に似た展開が予想される。

ナバナは、千葉産は2月初旬時点で平年の80%まで回復してきたが、干ばつ気味で生育は遅れている。2月初旬の降雨により、3月には平年並みに追いついて来ると予想される。

山菜は、山形産は例年より遅めの展開で、「たらの芽」「うるい」を中心とし、2月中旬から3月上旬が出荷のピークと予想される。昨年夏の大雨の影響を受け前年を下回る出荷が予想される。

(執筆者：千葉県立農業大学校
講師 加藤 宏一)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

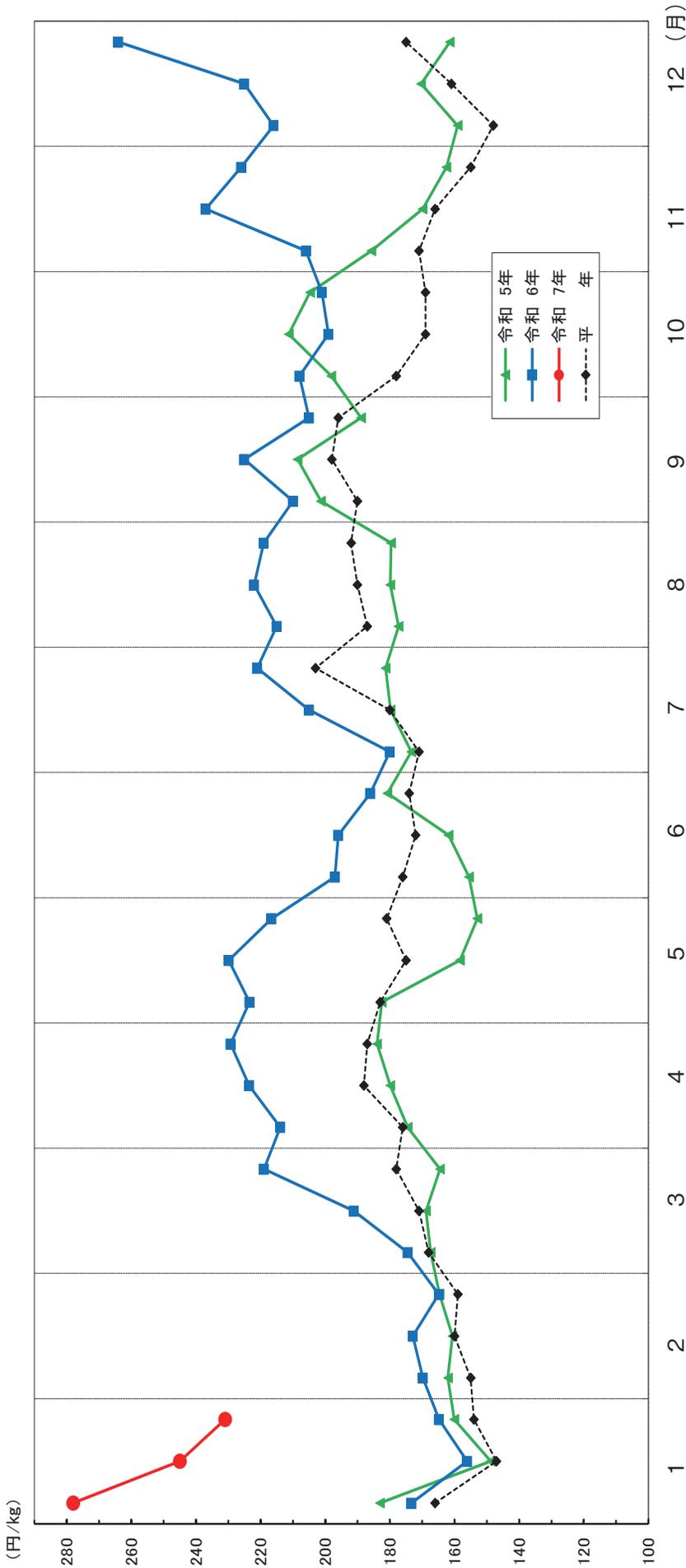
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月															
	上旬	下旬																																				
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184		
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295		
令和7年	306	279	261																																			
平	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	182	182	174	168	163	179	200			

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬	下旬																																		
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264	
令和7年	278	245	231																																		
平年	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190	198	196	178	169	169	171	166	155	148	161	175	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
 注1：平年とは、過去5カ年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。
 注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。